
天使VS悪魔

初花水色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使VS悪魔

【Nコード】

N3807R

【作者名】

初花水色

【あらすじ】

天使と悪魔は人間の魂を取りに行くのが仕事。今日も魂を奪い合っ
て天使と悪魔は衝突する。結構下らない事で対決しあうコメディ。

(前書き)

わりと下らないので注意です。

天使と悪魔が取り合うのは人間の魂である。

人が生前した善行悪行でどちらの側が魂を持って行けるかが決まる。

一人の人間を間に挟み、天使と悪魔が向かい合っていた。

「あっちむいてホイ」

死んだ人間の魂の色が何色か、大抵は見た瞬間分かるものだ。

「じゃんけんぽん」

白か、黒か。

それを見てどちらかが舌打ちをしながら引き下がる。どちらかが勝利の笑みを浮かべるのだ。

「あいこでしょ」

そういう決まりだ。

「あいこでしょ」

彼らにもルールがあるのだ。

「あっちむいてホイ」

悪魔が指さしたのは天使から見て左。天使は右は向いていた。

また決着がつかなかった。

悪魔の左手が震えた。

「キリがない！ 何なんだこれは」

彼らの前に横たわる人間の魂は、珍しい事に魂の色が白と黒の間色だった。きれいなほどに白と黒のどちらにも傾かない色をしている。

つまり、生前人間として善行も悪行も同じくらいこなしてきたために、天使も悪魔も自分のものと判断出来ない魂だったのだ。天秤がつりあった状態というのだろう。あまり前例のないケースだ。

通常は魂の色が　つまりは天秤がどちらかに傾くのだが、今回はどちらでもなく、困った天使と悪魔は“公正に”じゃんけんで勝

敗を決めようとしていたのだ。

なかなか決着はつかなかったが。

「じゃんけんで決着がつかないからって、ここまで長くあっちむいてホイが続くとは…気持ち悪いですね」

天使は白いフリルのハンカチを持って口元をおさえた。

「おれだつてお前と長々顔をつき合わせたくなんぞないわ！」

「では次はしりとりで決着をつけましょう。頭を使うのが得意な貴方には有利になるでしょうね」

きらりと天使の瞳が光った。明らかに悪魔を脳みそプリンなバカと見なした見下しの目だ。それをさほど隠しもせず嫌味を言つてのける。悪魔は相手を殴り飛ばしたい気持ちをおさえこむのに必死だった。

「いいだろう、言い出しといて後で吠え面かくなよ！」

「今時“吠え面”って…」

失笑を鼻からもらす天使に、悪魔は血管が浮き出る自分の額が分かった。

「ではまず、しりとり“り”から…ああ、そうだ。制限なしじやあそれこそキリがないので、例えば動物の名前などの規定を入れましょう」

それもそうだと悪魔は頷く。

「で、何にするんだ」

「天使学用語にしましょうか」

「ブツ殺すぞ。悪魔学用語にしてやろうか？」

「それこそはっ倒しますよ。大変不本意ですが、お互いの知識の偏りのない分野にするしかありませんね」

何かあるだろうと、天使と悪魔は悩みはじめた。

お互いに黙りこくって考えを広げていると、悪魔が指を鳴らした。
「お互い納得行くような制限分野を先に見つけられた方が勝ちで！
魂ももらう」

「じゃあ私はずっと首を縦には振りませんので」

「最悪だ」

また振り出しに戻った。

「戦闘機の名前とかどうです？ 戦艦か戦車でも可ですよ」

天使のくせに笑顔で何自分の得意分野口にしてんだ、と悪魔はげんなりした。しかし実際天使は彼らの“法”を破ったものにはひどく手厳しい。だめだこりゃと悪魔は首を振った。

「おれは近代兵器系列に興味はないから知らん。菓子の名前ならどうだ」

「気持ち悪いですね。そのナリで甘党男子気取りですか。乙男オトメンですか。残念過ぎて涙が出そうです」

また天使は純白のハンカチをこれ見よがしに目頭にあてた。その仕草すら苛立つというのに、悪魔はその発言こそが気に入らない。

「おと…なんとかって、何語だよ！ いや、お前は悪魔の専売特許知らんのか。大食だぞ、菓子だって食うわ」

「七つの大罪なだけでしょ。というか貴方、未だに人間界の流行語には疎いんですね。ま、とにかく私はブラックコーヒーを燃料に活動してますからその案は却下です」

流行りに疎いとけなされたが、悪魔は諦めたようで反論をやめた。目はすがめたままだったが。

「なら人間の歴史はどうだ」

「あーここ何世紀さうきゅう居眠りしてたから覚えてないです」

「お前…：怠惰は七つの大罪だろう」

呆れたように悪魔。

「居眠りは怠惰ではありません。うっかりしてしまったものです。うっかりは怠惰ではありません。それに人間たちの行為など些末すぎて頭に入れるほどではありません」

「お前本当に人間どうでもいいんだな」

一瞬、悪魔の諦めたような瞳が光るのが天使には分かった。

「仕事ですから。私は仕事には忠実なのです。ですから魂は渡しませんよ」

人間がどうでもいいなら魂寄越せ、という悪魔の目論みなど天使にはお見通しだ。

「もはやしりとりに以外でいいだろ、もう……トランプでもするか」「その方が早そうですね」

天使は服の袖口から一セットのトランプを取り出した。金色の甲冑を着た天使が裏に描かれた格調高いトランプカードだ。

「ミカエル先輩のご加護がありますように」

「それお前、大天使ミカエルのカードかよ。何かずるくないか」

「別にカードには何もありませんよ。実力差ははっきりしてるんですから。貴方こそイカサマなんてこすい真似しないでくださいね」

「今日日^{こんにち}“こすい”なんて使うか……？」

半ば本気で呆然としかけた悪魔に、死語だったかと天使は薄く顔を赤くした。

「貴方が意味を知ってるとは知りませんでしたよ。てゆうか今時“今日日”は使いませんよ。京都市美術館じゃあるまいし」

「いや、それこそ何故に日本の古都の美術館が……？」

「まだ略称に慣れていないんですか、頭弱いですね」

ちなみに京都市美術館、略して“京美^{きよび}”である。

「で、ゲームは何にします？」

なんだかんだとちゃっかりミカエル先輩プリントのカードを手できりながら天使は問いかける。

「定番のババ抜き」

「二人で？」

最悪ババの行き来が最終的には繰り返される可能性がある。

「ダウトで」

「二人で？」

二人しかいないので相手の手札が当然分かってしまう。

「七並べ」

「めんどい」

悪魔は一気に顔をしかめた。たしかに悪魔も地味だからちよつと

な…とは思っていたが、相手の断る理由の方が一枚上手だった。

「大貧民とか」

「賭けたくなるネーミングだからやめましょうよ」

「お前…さっきまでで一番の俗物発言だないのか天使」

「トランプ版ウノみたいな、ドボンはどうです」

「おれそのルール知らねえ」

「つつかえな…」

トランプを扇形に広げて口元にあてると、天使は悪態をついた。

道端の犬のフンでも見るような目を、しばらくすると天使はきらきらと輝かせた。

「何なら私が教えてさしあげますよ」

「お前に借りを作るなんて絶対に嫌だ」

は、と天使は嫌味な顔で失笑した。

「お前は本当に天使として失格だな」

「マメにツッコむ勤勉ツッコミ悪魔なんかに言われたくないです」

なんやかんやとこの天使の暴言にもつきあってやってるのだから、確かにこの悪魔はツッコミには勤勉だろう。

「スピードはどうです」

「なるほど。だが、実力伯仲って可能性もある」

「そうですね…私の圧倒的勝利を見せてあげてもいいのですが、万

一、億一兆…恒河沙じょうがしゃ、私と貴方の実力が天文学的確率の偶然で同等だったとして、同時にフィニッシュなんて光景、見たくありませんしね」

「お前…もう、ツッコまなくていいか？」

そろそろ悪魔は疲れてきた。どこか遠い目になる悪魔に対し、天使はぽんと手をうった。

「ああ、最も身近で最も勝敗が分かりやすくつく、同着のないカードゲームがあるじゃないですか」

天使はまた目を星のように煌めかせた。

「同着のないのならいくらかあるだろうが…何だ？」

「ポーカーですよポーカー。時間もそういりませんしね」

身近つて、お前まさか賭けポーカーやってるんじゃないかと悪魔は頭によぎった想像を賢明にも口にはしなかった。

ポーカーならイカサマをしない限り最上の手札が存在し、他に勝てる組み合わせはない。確かに同着はあり得ないはずだ。悪魔は頷いた。

「配るのはおれがやる。お前のカードだ、イカサマされたら困るしな」

天使は抵抗はしなかったが、顔を嫌そうにしかめて舌打ちをもつて不満の意をあらわした。もう悪魔は何も思わない事にした。

もう一度悪魔の手によりカードはきられ、五枚各自の元に配られた。

お互いに“ポーカーフェイス”で自分のカードと対応する。目指すは最上の手札により近い組み合わせだ。

どちらも待ったをかけずに、いよいよカードの表が公開されるに至った。

カードをひっくり返す瞬間、天使と悪魔のポーカーフェイスが崩れた。にやりと二人は笑っていたのだ。

天使が、ダイヤの三、ハートの三、ダイヤの二、ジョーカー。

悪魔は、スペードの三、クローバーの三、クローバーの二、ジョーカー。

二人ともフルハウスであった。

「……………き、キモい」

「さすがにおれも、かなり嫌だ」

「最高に嫌ですよ！ 何ですかこの一致！ やっぱりもう一枚三入れておくのだった」

「お前……というか、ジョーカー二枚がおかしいよな。というかジョーカー要らないよな」

「いいじゃないですか、ジョーカー。オールマイティ万歳」

「おい、待てよ。たしかマークはスペードが一番強いんだよな」

ルールブックをどこから取り出して悪魔は、同じ組み合わせの手札でもなんとか優劣をつけられないものかと思案する。

悪魔がページをめくる『はじめてのポーカー』^{タイトル}という書名の本を、天使はライターをもって燃やしはじめた。

「何すんだてめえ！」

「そんな小さく勝ちたくありません。圧倒的大差で魂をいただくつもりですから、そんなせせこましい勝ちなどいりません」

「いや、せせこましいって…今日日使わないだろ…。というか、何も燃やす事ないだろうが」

「意外に知能指数、低くないんですね」

ボキャブラリーが古いと告げられた天使は羞恥を隠しつつも微笑んで相手を刺すつもりの言葉を吐く。あまり効果はなかったが。

「もう何でも言え。結局、どうする」

言われて、天使は興ざめしたように眉を持ち上げた。

「……もうカードゲームには飽きました」

「お前は 本当に…」

気の遠くなってきた悪魔は、薄笑いにも見える非常に白けた目をつぶやいた。

「はっ、待つてください」

突然神妙な顔つきになって天使は悪魔に手で制止をうながした。

急に形相の変わった天使に、悪魔は怪訝になりながらも真面目に従う。

「……動いた」

天使は死んだはずの人間、彼らが所有権を取り合っているはずの魂の持ち主を指さしていた。つまり、天使の指の先にいる人間が動いたというのだ。死んだはずの人間が、だ。

「ラザロ徴候じゃないのか」

一度死んでキリストの力により生き返ったラザロにちなんで名づけられた医学用語だ。しかし。

「頭大丈夫ですか。この生兵法。ラザロ徴候は脳死患者が自発的に

体を動かす事を言うのですよ。この人間は脳死状態などではなく、死んだはず」

ぴくり、と今度は悪魔も死んだはずの人間が腕を動かすのを見た。途端に、小さな機械音が規則的な音をきざみはじめた。

二人は目をこれ以上なく見開いた。

死して横たわるだけのはずの遺体につながれた機械が、心音を音と乱れた線で“遺体”ではないと弱々しく主張しはじめたのだ。

「せ、先生…、患者さんが…！」

遺体を移動させ、きれいに拭いてやろうと訪れた看護師が、手術室から慌てて出ていった。

弱々しくも安定した拍動は“遺体”から“患者”に戻った人間がもうしばらくは“遺体”にはならないだろうという事を教えていた。

「まさか…：仮死状態だった…：とでもいうのですか…：？」

「ああ…まさか…。あの、十四の身空で重婚に耐えかね服毒自殺したって女の時も、すっかり騙されたもんだよな…。ま、あいつはすぐにまた短剣で自分刺してたけどな…」

「ええ、あの時は結局、貴方が自殺者を二人、ある意味愛のために死んだ男を一人、私がいただいたのでしたけれど…」

今回はもう、そういうケースは通じないだろう。現代医学がこのよみがえった人間を守るように取り囲んでいるし、何より医者がかげこんで来て、本格的に起死回生の終止符を打とうとしている。

「…：もう、下らない。どうでもいい…：！」

まるで反抗期のティーンエイジャーのように、天使は“患者”から顔をそむけた。悪魔も心の中では同じ事をしてた。しかし大人しくしかめっ面をするのみにとどめておく。

“患者”はもはや、彼らの手の届くような場所にはいない。また死にかけるかしない限り、天使と悪魔がこの場に来る事はないだろう。

「あーあ、誰か死なないかな」

「おいッ！」

すかさず『不謹慎な事を言うもんじゃない』とばかりの顔で悪魔が声をあげた。

「あーもう下らない。つまんない。早く最後の審判下ればいいのに」
ちらりと窓の外を見て、続ける。最後の審判イコールこの世の終わりである。

「もう一回バベルの塔崩壊するとか。よさそうなのあちこちにあるじゃん。ちょうど今、建設中のやつとかも、おあつらえむき」

バベルの塔とは人間が驕おごって天に近づこうと高い塔を建てたために神の怒りを受けてしまい、罰として言語分割が行なわれ崩壊してしまった塔のことである。これ以上世界の言語が分かれてしまうと、おそらく市区町村レベルで言葉が通じなくなるだろうという予想を悪魔はしている。

やるべき仕事をなくし、すっかりやる気のない顔と口調になってしまった天使はふらふらと歩きはじめた。

なんとという暴言ばかりを吐くんだと、悪魔はすっかり呆れかえってしまっただが、彼ももはやこの場に用はない。

天使は翼を広げて飛び去っていったところだ。悪魔も背中中の翼を広げると、最後にもう一度だけよみがえった“患者”を見下ろした。
「次はもう少し悪行をつんでおけよ」

頼むから、という悪魔の心の声が聞こえた者はいないだろう。

天使と悪魔が人間の魂を取り合うのはいつもの事だが、今回みたいに取り合いが長引くのは勘弁していただきたかった。もし今生き返った人間がまた死んだ時に魂を取りに来るのが自分ではなかったとしても、同胞がまた天使と対戦するはめにならないように是非ともこの人間には悪い事を良い事より多くしてもらいたかった。すんなり事が運ぶように。今回のようにならないのであれば、善行ばかりしているでも構わない。

悪魔は苦いものを飲み下すかのように笑い、後はもう二度と振り返らずに住処へと帰って行った。

その日、とある病院では患者がよみがえったことで人々に奇跡の

存在を思い出させていたという。

完

(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

悪魔学や天使学は正式な学問じゃないのですよね……。でもほぼそれに近いほど書籍も多く、一種体系化されている……はずですね。たぶん！（こら）

ちなみに、仮死状態だった女はシェイクスピアの悲劇『ロミオとジュリエット』のジュリエットです。ロミオも彼女も自殺してるので、地獄行きなのです。キリスト教だと自殺は地獄に行くのですから。

あと天使が持ち帰ったのはジュリエットの婚約者パリスで、ロミオに殺されました。

詳しくはロミジュリを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3807r/>

天使VS悪魔

2011年3月5日16時25分発行